

## [研究論文]

## 反転スペクトルのパラドックス

塚原典央

## はじめに

われわれが他人について観察できるのは、他人の言動だけである。つまり、他人の言っていることと他人の身体の振る舞いしか観察することが出来ない。他人の気持ち、思い、考え、感覚を、つまり他人の心を直接観察することは出来ない。この点から生じる問題の一つに、「反転スペクトル」あるいは「逆転スペクトル」の問題と呼ばれるパラドックスがある。最近「反転クオリア」、「逆転クオリア」の問題とも呼ばれている<sup>1)</sup>。それは例えば、今私には熟したトマトが赤く見えているが、私には他人の感覚の内容を直接捉えることは出来ないのだから、他人にも私と同じように熟したトマトが赤く見えているのかどうかは分からない。従ってひょつとすると、他人に「赤色」に見えるものが私には「青色」に見え、逆に他人に「青色」に見えるものが私には「赤色」に見えているのかもしれない、という問題である。小論ではこのパラドックスを手がかりとして、後期ウィトゲンシュタインのいわゆる「私的言語批判」の問題を考察する。そしてこの問題を特に「感覚語の習得」という視点から捉えてみたい。

## 赤いドラえもん

この反転スペクトルという想定は、幾つかの条件はつくものの、可能だと考えられる。例えば、私は生まれた時から一貫して人々に赤く見えるものが青く、そして人々に青く見えるものが赤く見えているとする。つまり、私にはトマトも唐辛子も青く見えている。そして、晴れ渡った空も、大海原もドラえもんも赤く見えている。しかし「赤い」や「青い」といった言葉は、生まれつき持っているものではなく、後天的に学ぶ事柄に他ならない。そして私は青いトマトや、青い消防自動車の前で「このトマトの色が赤色です」、「消防自動車の色は赤色です」と教わり、晴れ渡った赤い空や赤いドラえもんが指さされて、「空は青色です」、「ドラえもんの色は青色です」と教わる。したがって、私は赤いものを「青い」と言い、青いものを「赤い」と言うように覚えてしまう。

しかし、たとえ私の赤色と青色の色覚が反転していても、この反転が私に分かるだろうか。

---

受付日 2007.11.1

受理日 2007.12.17

所属 福井県立大学学術教養センター

また、私を観察している他人に分かるだろうか。私は「トマトの色は」と聞かれれば、たとえ青色のイメージを思い浮かべていても「赤色です」と答え、「空の色は」と聞かれれば、「青色です」と答える。つまり人々が「赤い」と言っているものを私も「赤い」と言い、人々が「青い」と言っているものを私も「青い」と言っている。この限りでは、人々と私の間で何の齟齬もきたさない。つまり、私の振る舞いが人々と一致する限り、感覚の内容はどうでもよい、ということになる。

## ウィトゲンシュタインと行動主義

ところでウィトゲンシュタインの『哲学探求（以下、『探求』あるいはPUと略記する）<sup>2)</sup>』の中にも、一見この反転スペクトルのパラドックスを認めている様にも読める文章がある。

PU I § 272：私的体験において本質的なことは、実は各人がそれぞれ私的体験の固有な事例を持っているということではなく、他人もこれを、あるいは何か別のものを持っているかどうかを、誰も知らないということである。したがって、人類のある一部の人々はある赤色の感覚を持っており、他の一部の人々はそれとは異なる赤色の感覚を持っているという仮定は、——検証不可能ではあるが——可能であろう。

先の赤色と青色が反転して見えているという仮定は、「異なる赤色の感覚を持っているという仮定」のうちの一つである。そして先に見たように、本当に私の色覚が反転しているとしても、実際には何の齟齬もきたさなかった。言い換えれば、私の色覚が反転しているかどうかは、確かめようがない、つまり「検証不可能」なのである。また、ウィトゲンシュタインは『私的経験』と『感覚与件』の講義のためのノート（以下、LPEと略記する）において次のようにも述べている。

LPE p.255.：「無視する」に戻ろう！ 私は生命を無視しているように見えるだろう。生理学的に理解された生命ではなく、意識としての生命である。また生理学的に理解された意識ではなく、すなわち外部から理解された意識ではなく、経験の本質そのものとしての意識、世界の見え、いや世界そのものとしての意識である。

ここで「生理学的に理解された意識」また「外部から理解された意識」とは、例えば大脳生理学的に大脳の状態として捉えられた意識であろう。それに対して、赤色の感覚や青色の感覚そのものは、われわれの「経験の本質そのもの」、「世界そのもの」としての「意識」内容の一つに他ならない。しかし反転スペクトルの議論においては、この意識そのものが議論から滑り

## 反転スペクトルのパラドックス

落ちてしまっている様に見える。つまり、意識の内容がどのようなものであっても、振る舞いさえ他の人々と同じならば、例えば、人々が「赤い」と言っているものを私も「赤い」と言い、人々が「青い」と言っているものを私も「青い」と言うならば、何の問題も起こらないからに他ならない。したがって、こういった議論は意識を「無視」するものではないか、というわけである。

しかし、ウィトゲンシュタインがこのパラドックスを認めているとする訳にはいかない。何故なら、そうしてしまっただけではウィトゲンシュタインが「行動主義者」になってしまうからである。赤色や青色の色覚や痛みといった感覚は、感覚自体は問題ではなく、振る舞いのみが問題なのだとするのは、心的な事柄は総て行動に還元できるとする、最も強い意味での行動主義そのものではないだろうか。

ウィトゲンシュタインは行動主義者ではない。例えば『探求』第I部第304節において、彼は仮想の対話者に「しかし、それでもあなたは痛みのある痛みの振る舞いと、痛みのない痛みの振る舞いの間には違いがある、ということは認めるだろう」と言わせて、これに対してウィトゲンシュタイン自身「認めるだろうだって。それよりもっと大きい違いがなどあり得るものか」と答えている。ウィトゲンシュタインにおいては、痛みの振る舞いだけではなく、痛みの感覚も問題となる。それでは、痛みという感覚を認めるということは、他人には直接捉えることの出来ない私的対象としての感覚を認めることであり、従って私的言語を認める事になるのではないか。これはおかしい。私的言語批判を展開しているのは、他ならぬウィトゲンシュタイン自身である。では一体どうなっているのか。

## 「痛み」の学習1：私的言語

まず「私的言語」が如何なるものであるのかを復習しておこう。

PU I § 243 [部分] : しかし、次のような[私的]言語も考えられないだろうか。それはある人が自分の内的体験——彼の感覚、気分など——を、自分一人で使用するために記録し、あるいは言語表現をすることができる言語である。——これに対してわれわれは、そのようなことならわれわれの日常言語でできないであろうか、と言われるであろう。——いや私はそんなことを考えているのではない。そのような[私的]言語に含まれている語は、発話者のみが知り得るもの、つまり発話者の直接的で私的な感覚を指し示さなければならぬ。それゆえ他人はこの言語を理解することができない<sup>9)</sup>。

私的言語とは、この「言語に含まれている語は、発話者のみが知り得るもの、つまり発話者の直接的で私的な感覚を指し示す」言語である。例えば私的言語において「痛み」という語は、

今私だけが感じている、私以外の誰も感じることをできない、私的対象であるこの私の痛みという感覚を、直接指し示している。

そしてウィトゲンシュタインは次の節の前半で、以下の様に述べている。

PU I § 244 [部分] : どのようにして語は感覚を指示するのか。——ここには何の問題もないように見える。つまりわれわれは日々感覚について語り、そして感覚の名前を呼んでいる。しかし名前とそれによって名づけられたものの結合は、どのようにして確立されるのか。この問題は、人間は感覚の名前——例えば「痛み」という語——の意味をどのように学ぶのかという問題と同じである。

どのように「痛み」という語と痛みの感覚とが結びつけられているのかは、「痛み」という語の意味をどのように学ぶのかという問題と同じである。さらにウィトゲンシュタインの意味の使用説に従えば、この問題はどのように「痛み」という語の使用を学ぶのかという問題に他ならない。そして、われわれは学んだようにしか言葉を使用することができないのであり、その学び方あるいは教え方が言葉の意味を、そして言葉とその言葉が指示する対象との関係を決定していると考えられる。

では「痛み」という語が私的対象である痛みの感覚と直接結合されている私的言語では、この「痛み」という語の使用はどのように学ばれるのだろうか。他人には知ることもできず、勿論感じることもできない私的対象の名前を、どのようにすれば例えば大人は子供に教えることができるだろうか。実はこのような言葉を教えることはできない。たとえ仮に、この大人が「痛み」という語を自分の私的対象である痛みの感覚と直接結合して使用することができるとしても、この大人は子供の感覚を直接捉えることができない。そしてこの大人は自分の私的対象である痛みの感覚と子供の私的対象である痛みの感覚とを比較することもできない。したがって大人はその子供に、「今君が感じているものが痛みという感覚だ」と何時教えればよいのか分からないのである。それは、そもそも私的対象である感覚そのものに、他人はアプローチのしようがないからに他ならない。そしてこのことを逆に見るならば、教えようがない、学びようがないという観点からも、私的言語が不可能であることが明らかになるのである。

この論点は更に展開することができる。例えば「ワンワン (犬)」という語を、大人が子供に教える場合を考えてみる。大人は子供に実際に様々な犬や絵本の犬を見せながら、つまり直接対象を指して、「これがワンワンだ」、「それもワンワンだね」、「ここにもワンワンがいるね」と、繰り返し繰り返し直示的教示<sup>4)</sup>を行って教えていくだろう。しかし痛みを始め、痒み、くすぐったさ、味、悪寒、快感、苦しさ、といった感覚や気分、感情は、このように直接対象を指して教えることができない。子供の側から言えば、痛みを持っている時にその痛みの感覚が

## 反転スペクトルのパラドックス

直接指されて、「それが痛みだ」と教わることはできない。したがって、「痛み」、「痒み」、「快感」、「楽しさ」、「腹立たしさ」といった言葉は、実はその様に呼ばれる感覚や気分、感情という私的対象と直接結合されていないことになるのではないか。それはやはり、他人の感覚を直接捉えることはできない、という事実がある以上致し方のないことなのである。よって、私的言語ではなくても、日常言語における感覚語等も対象を直接指し示す事による、直示的教示という仕方では教えることはできない。

## 「痛い」の学習2：日常言語

では日常言語における感覚語はどのように教えられるのか。その答えは、先の『探求』第1部第244節の後半部分にある。

PU I § 244 [部分]：この問題に答える一つの可能性は、語が感覚の根源的で自然な表出と結合され、そしてその代わりに使われる、というものに他ならない。例えば、ある子供が怪我をして泣き叫ぶ。すると、大人たちはその子供に声をかけ、まず感嘆の表現[例えば「痛い!」]を教え、後に文章[例えば「私は膝小僧が痛い」]を教える。大人たちはその子供に新しい痛みの振る舞いを教えるのである。

「するとあなたは、「痛み」という語は実は泣き叫びを意味している、というのか。」——とんでもない、痛みの言語的表現は泣き叫びの代わりをするのであって、それを記述しているのではない。[『断片』 § 545参照。]

子供がまだ言葉を習得していないとするならば、大人が捉えることができるのは子供の振る舞いだけである。痛みについてならば痛みの振る舞い、あるいは痛みの表出のみが大人にとってアプローチ可能なものとなる。この痛みの「自然で根源的な表出」が「痛み」という語の習得の軸となる。つまり、大人が見ているその子供が痛くて泣いていると思われる場面で、大人は泣いている子供に「『エーン』と泣く代わりに『痛い』と言いなさい」と教える。このような訓練あるいは躰けが繰り返されると、子供は泣く代わりに「痛い」と言うようになる<sup>9)</sup>。以上のような点であるとするならば、感覚語の習得においては「表出が軸となる」という点が重要である。このようにあることの表出の代りに言葉を発するように教えることを、「表出代替的教示」と呼ぶことにする。繰り返しになるが、大人は子供の感覚そのものを直接捉えることができない以上、子供が痛みを感じている時にその痛みを指して「それが痛みというものだ」と教えることはできない。つまり「痛み」という語を、直接子供の痛みの感覚と結合するように、教えることはできない。そこで、大人には子供が痛みを持っているであろう場面で、つまり子供が痛みの表出をしている場面で、例えば転んで膝小僧をすりむいて泣いている時に、「今度

から、泣くのは辞めて、『痛いよ』と言うことにしようね」と表出代替的教示を行う。この痛みの自然で根源的な表出がなくては、「痛い」という言葉を教えようにも教えようがない、この表出がなくては「痛い」という語が意味を持ち得ない、そして使用することができないのである<sup>6)</sup>。

LPE p.240. : 「歯痛」という語を使ってわれわれが行う〔言語〕ゲームは、われわれが歯痛の表出と呼ぶ振る舞いが存在することに、完全に依存している。

### 痛みの表出と痛みの感覚

しかし、泣くという痛みの「表出」は、どれほど「自然で根源的」であっても、あくまでも表出であって痛みそのものではない。感覚とその表出は別個なものではないか。例えばわれわれは痛くもないのに顔をしかめて泣いて見せたり、「痛い」と言ったりできる。また痛いのに涼しい顔をして痛くない振りをすることもできる。

LPE p.245. : 呻きは歯痛の表出である、と私が言う時、一定の状況下ではその背後に感覚のない呻きがあり得るということは、私の〔言語〕ゲームでは許されていない。

表出は常に欺く、と述べることは無意味である。

感覚（私的経験）の表出を使う言語ゲームは、それらの表出は嘘かもしれない、とはわれわれが言うことのない表出を使うゲームに基礎づけられている。

LPE p.253. : 「表出は常に嘘であり得る。」しかし、言葉が堅く結びつけられている表出について、どうしてその様なことが言えるのか。

確かに痛くもないのに「痛い」と言うことができる。しかしまず、痛い時に「痛い」と言うことができなくては、嘘をつくことはできない。初めから「表出は常に欺く」としてしまったのでは、そもそも「痛み」という言葉を習得することができないのである。そして、言葉を習い始めた子供（2歳前後）に振りをすることができるはずもない。

同様に言語を習得してしまった大人の場合、泣くという振る舞いと痛みという感覚を区別することができる点に関して、ウィトゲンシュタインは次のようにも述べている。

LPE p.287. : しかしわれわれは常に「単なる振る舞い」と「経験+振る舞い」とを区別しているだろうか。もし誰かが炎の中に落ちて叫んでいるのをわれわれが見たとしたら、

## 反転スペクトルのパラドックス

「勿論二つの場合がある [「単なる振る舞い」の場合と「経験+振る舞い」の場合] ……」と自分自身に言うだろうか。あるいは私が君を目の前で見ている時に、私は [その様な] 区別をするだろうか。君はするだろうか。君にはそんなことはできない。ある場合にわれわれがそう [二つの場合を区別] するということは、われわれが全ての場合にそうするというを示してはいない。[LPE p.263.参照。]

われわれは他人を見ていて、その人の「単なる振る舞い」、極端に言えばその人の物理的な動きとその動きの背後にある思いや考え、感情、感覚を常に区別してはいない。この区別は、先の痛い時の振る舞いと痛みもないのに痛い振りをするものの区別の基になっているものに他ならない。例えば、転んで膝小僧をすりむいて泣いている子供を見て、まず「右の膝小僧がすりむけて血がにじんでいる、その膝小僧を両手で押さえている、顔をしわくちゃにしている、目から涙を流している、大きな声で泣いている」ことを「単なる振る舞い」として見て、これらの事実から推論して初めて、「この子は痛いに違いない」と判断するわけではない。この状況でこのような振る舞いをしている子供を見かければ、われわれは端的に「この子は膝小僧が痛い」と判断する。われわれは端的に痛がっている子供、膝小僧が痛い子供を見ているのである。痛みの表出と痛みの感覚の結びつきは、これ程強固なものなのであり、両者は表裏一体なのだと言えるだろう。

PU I § 245 : それでは私はどのようにして、言葉で痛みの表出と痛みの間にさらに割って入れるのか。

ここで「言葉で痛みの表出と痛みの間にさらに割って入る」こととは、例えば先のように痛みの表出という振る舞いを基に、そこから痛みがあると推論することであろう。そして勿論、割っては入ることはできない。痛みの表出と痛みの感覚の結合は動物的、本能的なものという意味で自然で根源的なのである。

### 「痛みの感覚」

話を学習に戻そう。「痛み」の表出代替的教示が終わった段階ではまだこの子供の言っている「痛い」は記述でも、感覚の名前でもない。泣くことが痛みの自然で根源的な表出であるならば、この段階の「痛い」は「社会的なあるいは言語的な」痛みの表出である。ただ、子供にこの教示が徹底的に行われて、痛いときに泣くのと同じように自然に「痛い」と言うようになれば、「痛い」と言うことが泣くこと同様痛みの「自然で根源的な」表出となる。つまりそれほど「痛い」という言葉と痛みの関係は強くなる。このように言語的代替表出「痛い」が確立

されて、更に必要最低限の言語上の教示が行われて初めて、「痛い」の名詞形の「痛み」を痛みの名前として教えることができるようになる。この段階で「痛み」という名前が痛みの感覚と結合されるわけだが、この結合は今まで見てきたように直接的なものではなく、痛みの表出というわれわれの振る舞いを介して結合される。つまり「痛み」という言葉は、泣くという痛みの自然で根源的な表出がある時に、そして「痛い」という語を使用する言語的な表出をしている時に、感じているものに結びつけられるのである。つまり、痛みとは痛みの自然で根源的な表出がある時に感じている感覚、更に、われわれが「痛い」と言っている時に感じている感覚と規定される。「痛み」という語が痛みの表出を軸にしてしか学べない以上、この語が指している痛みの感覚はこのように規定される。言葉は習ったようにしか使用することができないのであり、そしてこの習ったことがこの言葉の意味なのである。

それでは他人の痛みはどうなるだろうか。

LPE p.287. : ここで人を誤らせる象は、私は自分のマッチ箱を〔直接〕見るけれども、彼の容貌は風評で知っているだけだ、というものである。われわれは、「私は彼の振る舞いを観察することによって、『彼は歯が痛い』と言う、しかし私自身は歯に痛みを感じることによって、その様に『私は歯が痛い』と』言う」と述べることはできない。(このことから、「歯痛」は二つの意味を持つ、一つは私に対してもう一つは他人に対してのものだ、と述べる人がいるかもしれない。)

自分の持っているマッチ箱は直接見ることができる。これに対して、会ったこともなく写真や映像も見たことのない人を、「鼻が高い」とか「髪は短い」とか「イケメンだ」といった風評でだけ知っている、あるいは風評で間接的にのみ知っているということもある。しかし、この区別を自分の痛みと他人の痛みに適用してはならない。つまり、自分の感覚は直接捉えることができるが、それに対して、他人の感覚は彼・彼女の振る舞いから推論して分かる、あるいは間接的にのみ知ることができるだけだ、としてはならない。勿論、私は私が歯に感じる痛みから推論して「私は歯が痛い」と言っているのではない。端的に私は歯が痛み、「私は歯が痛い」と言っている。それは私の言う「私は歯が痛い」は、私の状態の記述ではなく、私の歯痛の表出の一部だからである。そして、他人の場合も同様に、私は端的に歯が痛い人を見ている。まず私は他人の「単なる振る舞い」を観察して、そこから「この人は歯が痛いのだ」と推論しているのではない。

ウィトゲンシュタインはこの点について、また次のようにも述べている。

LPE pp.263-4. : 確かに、顔の表情〔表出〕の記述が感情の記述を意味する、(として使用

## 反転スペクトルのパラドックス

される)ことは可能だ、勿論別なものを意味する(として使用される)こともある。われわれはしばしば「彼はそれを聞いた時、渋い顔をした」といった表現を使用し、そしてそれに加えてその表情〔表出〕は本物だったなどと付け加えてはいない。他方、同じ言葉で役者は演技する。あるいはさらに、その表情〔表出〕が本物であるか否か未定にしておきたい場合もある。われわれは表情〔表出〕の記述によって感情を間接的に記述する、と述べることは全くの間違いである。

ここでウイトゲンシュタインは「感情」について述べているが、同じことが「感覚」についても言えると考えられる。他人の場合も基本的には「痛みの表出をしている人＝痛みを感じている人」なのである。舞台の上での演技や嘘について、痛い振りをしている場合も確かにある。しかしそういった場合は二次的なものであって、第一次的には表出の描写は感覚の描写に他ならない。そうでないとするなら、「私を感じる」痛みと「他人が持つと推論される」痛みの、全く独立した二つの「痛み」があることになる。そして他人の場合と区別される、私だけが感じるものとしての痛みの感覚なるものを想定することが、それと知らずに私的言語のドアを開けてしまうことになる。私の場合も他人の場合も、痛みの表出と痛みの感覚は表裏一体でなければならないのである。

まとめることにする。私自身の場合も他人の場合も、「痛み」という語と痛みの感覚は表出を介して結びつけられる。痛みの感覚とは私自身の場合も他人の場合も、痛みの表出がある時に感じているものに他ならない。つまり痛みの感覚が「痛み」という言葉を規定しているのではなく、逆に痛みの表出を基にして、痛みの感覚が言語的に規定される、あるいは言語的に作られるのである。このような痛みの規定に従ってあえて述べれば、私自身の場合も他人の場合も痛みの表出もまた痛みのうちだ、ということになる。

## パラドックスの解消

最後に反転スペクトルのパラドックスに決着をつけよう。この問題は、トマトや唐辛子がたとえ青色に見えていようと「それらの色は赤色だ」としている限り問題がない。換言すれば、振る舞いが一致していれば、感覚の内容はどうでもよい、というものだった。しかし「たとえ青色に見えていようと」と言う場合の〈青色〉とはどんな色なのだろうか。赤色とはわれわれが「赤色」と言っている色であり、青色とはわれわれが「青色」と言っている色である。しかしこの〈青色〉は私的対象として考えられた色であり、教えることも教わることもできない私的言語の青色に他ならない。反転スペクトルのパラドックスは、それと知らずに私的言語を使用してしまうために陥るパラドックスに過ぎない。従って、私的言語論が十全に理解され、批判されれば、このパラドックスは消えてなくなるはずである。

もう一度色彩語を学ぶ場面を考えてみよう。「このトマトの色が赤色だ」、「ドラえもんの色が青色というのだ」と色の直示的教示を行う場合、大人は子供の赤い感覚や青い感覚を直示しているのではない。大人は子供に赤色が見えた時に、その感覚を直接指して、「それが赤色だ」と教えることはできない。大人が子供に直示しているのは、目の前のテーブルの上にあるトマトであり、絵本に描かれているドラえもんに他ならない。そのトマトやドラえもんが子供に何色に見えているのかは、問題にできない。そうではなく、目の前にあるトマトの色が「赤色」であり、絵本に描かれたドラえもんの色が「青色」なのである。繰り返せば、赤色に見えるから「赤い」と言うのではなく、われわれが「赤い」と言っている色が赤色なのであり、青色に見えるから「青い」と言うのではなく、われわれが「青い」と言っている色が青色に他ならない。従って確かに、その子供がわれわれと一致する振る舞いができるならば、その子供の私的感覚の内容はいつでもよいことになるだろう。ただし、その子がわれわれと振る舞いを一致させるためには、われわれと同じように学ばなければならない。そして同じように学ぶためには、その子はわれわれと同じような表出ができなくてはならないのである<sup>7)</sup>。

## 注

- 1) 反転クオリア( *inverted qualia* )の議論は、チャーメーズが『意識する心』において「ハード・プロブレム」と呼んでいる問題の一つであるが、この議論はかなり限定されている。それは、脳の機能状態が同一であっても、それに伴われるクオリアが異なっている可能性を否定することができない、というものである。しかし小論では脳の問題は扱わないことにする。
- 2) ウィトゲンシュタインの著作については文献表参照。
- 3) 引用における [ ] 内は塚原挿入。
- 4) 「直示的教示」については、塚原「規則を学ぶ」を参照。
- 5) この点について詳しくは、塚原「私的言語と規則」を参照。
- 6) 仮に一切痛みの表出をしない子供がいるとしたら、例えば転んで膝小僧をすりむいても顔色一つ変えずに笑っていたりする子供には、「痛い」という言葉を教えることができない。また、この子供が天才で表出を伴わない感覚に自分で名前をつけてしまうという想定が可能かという議論もある。しかし、この想定は否定される。『探求』第1部第257~261節参照。この点について詳しくは、塚原「ウィトゲンシュタインの『かぶと虫』」参照。
- 7) ここで、物の色や形は痛みといった内観されるものとは区別されるべきだ、と言われるかもしれない。つまり、痛みや、痒み、そして悲しみといったものは他人に直接対象を示すことはできない。これに対して、外界にある色や形の場合には「このりんごの色が赤色だ」

## 反転スペクトルのパラドックス

とか「このビー玉の形が球形だ」というように、他人に直接示すことができるという違いがある。この点についての詳細は稿を改めることにしたいが、見通しを示しておきたい。

そもそもある人に物が見えているのかどうか、例えば赤ん坊の視力の有無を確かめるために、われわれはその赤ん坊の視覚内容そのものを調べることはできない。そうではなく、例えば人差し指をその赤ん坊の目の前で動かして、その子の目が指の動きを追えるかどうかを調べることによって、視力の有無を判断する。赤ん坊の視力を視力そのものではなく、「目が指の動きを追う」という振る舞いによって判断する。言い換えれば、この目が指の動きを追うという振る舞いは、視力の「表出」と言えないだろうか。つまり、視覚に関する色彩語や形体語についても、それらの習得の軸になるのは、やはり「表出・振る舞い」に他ならないのではないか。色彩語・形体語においても、語と感覚は直接結合されるのではなく、「表出・振る舞い」を介して結合されると考えられる。

**文献表**（邦訳のあるものは参照させていただきました。ありがとうございました。）

## L. Wittgenstein

- ・『私的経験』と『感覚与件』の講義のためのノート（LPE）：‘Notes for Lectures on “Private Experience” and “Sense Data”’, in J.C.Klagge and A.Nordmann (eds.), *Philosophical Occasions 1912-1951*, Hackett Publishing Company, 1993. 邦訳：『個人的経験』および『感覚与件』について、大森荘蔵訳、ウイトゲンシュタイン全集6、大修館書店、1975。
- ・『哲学探求』（PU、『探求』）：*Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1953. 邦訳：『哲学探究』、藤本隆志訳、ウイトゲンシュタイン全集8、大修館書店、1976；黒崎 宏訳・解説、『ウイトゲンシュタイン『哲学的探求』第I部・読解』、産業図書、1994。
- ・『断片』：*Zettel*, G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright (eds.), Basil Blackwell, 1967. 邦訳：『断片』、管豊彦訳、ウイトゲンシュタイン全集9、大修館書店、1975。

## その他

- ・D. J. チャーマーズ、林 一訳、『意識する心』、白揚社、2001。
- ・塚原典央、「ウイトゲンシュタインの『かぶと虫』」、『福井県立大学論集』、第22号、2003。
- ・塚原典央、「私的言語と規則」、『福井県立大学論集』、第25号、2005。
- ・塚原典央、「規則を学ぶ」、『福井県立大学論集』、第27号、2006。